

---

# 蒼く、輝いて。

蒼衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼く、輝いて。

### 【Nコード】

N6344Q

### 【作者名】

蒼衣

### 【あらすじ】

黒の組織を消滅させた江戸川コナン。ベルモットに貰った二つの解毒剤で江戸川コナンは工藤新一の姿に戻るが、後から待っていたのは幸せな日々ではなく、いつくるかもわからない死期だった。新蘭。

## 第一章 薬

工藤新一、いや工藤新一に戻ろうとしている江戸川コナンは博士の家にいた。

横あるベッドの上にはには、時計型麻酔銃を使って眠らした灰原がいる。麻酔銃のせいか、ぐっすりと静かな寝息を立てて寝ていた。

「新一」

博士が本来の名前で江戸川コナンを呼ぶ。

灰原が寝ているベッドに腰かけ、新一は灰原の寝顔を見ていた。

「いいのか、新一」

新一と博士しか意味が分からない話を続ける。

新一はかけていた眼鏡を外し目を瞑った。

「ああ、いいんだよ」

新一は静かにそう言うと、手に持っていた赤いカプセルと白いカプセルの薬を見た。

「こいつには、人生やり直してほしいんだ。」

「じゃが……それでは……」

「俺はいーんだよ、十分自由に生きてきたしっ！」

につと笑う新一を見て博士は眉を落とした。博士はこんな笑顔を見たいわけではない。

まだ小さな姿の新一は笑顔だったが、そこには悲しみが隠されていることは博士にも分かっていた。

やっと黒の組織、ジン達を潰したと言うのに、真実を知ってしまったのだから。

『この白いカプセルは、あのシェリーが作った毒薬の成分を崩壊さ

せることのできる唯一の解毒剤。もちろん元の姿に戻るわ。

そして、こっちの赤いカプセルは元の姿には戻れるけど……毒の成分は殺せないのよ。』

この言葉を発したのは組織を壊滅に追いやったとき、ベルモットが発した言葉。

灰原が作った毒薬をジンに飲まされた俺は体が小さくなってしまった。

だが、この毒薬は本来一瞬で人を毒殺できる薬だ。

なぜだか毒薬の効果はなく、体だけが胎児化してしまった。

だが、ベルモットが言うには体の中に毒薬の成分は残っていて、ゆつくりとだけれど確実に体を蝕んでいくと言う。

確かに新一は最近体調が悪かった。それにたまに異常なまで熱がある。そして、止まらない咳。心臓の痛いほどの発作。どれもこれもこの毒薬の成分が体をむしばんでいるとしかいいようがない。

新一はこれをベルモットから渡された時から決めていた。

灰原にこの白いカプセルを飲ませ、俺は赤いカプセルの方を飲むと……。

灰原にそれを言うとな案の定、反対した。

仕方なく博士で俺の為に開発してくれた時計型麻醉銃で灰原を眠らしたのだ。

「それに、こっちの飲めば体がデカくなる時苦しくねえらしいぜ。俺は男だ、苦しいのは我慢できる」

白いカプセルを摘みながら博士に見せた。

「新一が決めたならわしは何も言わん。」

「悪いな、博士。」

新一はそう言うベッドの横にあった机からさっき入れたばかりの冷たい水が入ったグラスを一つ持ち寝ている灰原を支えながら座ら

した。

そして白いカプセルを灰原の口に入れ水を流し込む。

寝ていても灰原は自然と飲み込んだ。

「じゃ、俺は自分の家行ってくる、灰原見ててくれよ。」

まだ変化が現れない灰原を博士は一度見ると静かに首を縦に振った。

「じゃ、戻ってくる。」

”戻ってくる”とは新一の姿に戻りに工藤家に行くと言うことだ。

「ああ、気をつけるんじゃぞ。」

博士の言葉を後にし博士の家から新一は出た。そして真横にある新一の家に入っていた。

今は夜中の二時位だろうか。電気のついていない家の中は真っ暗だった。

電気も付けず、階段を上り新一は自分の部屋に入っていた。

と、同時に暗かったはずの部屋が電気の光に包まれた。驚きながらも部屋を見ると電気を付けるスイッチに手についてたっている服部の姿があった。

「おっそい帰りやな、工藤。」

服部はそう言つとベッドに飛び乗り胡座をかいて座る。

新一は呆れながら、冷静な声で言った。

「不法侵入で警察に連行するぞ、服部。」

もちろんこんな事を言ったが、本当に警察に突き出すつもりは一切ない。

## 第二章 訪問者

「すまんかった。けど、鍵開いてたんから工藤も工藤や。入ったのが俺で良かったやんけっ！」

白い八重歯を見せながら笑う服部。

新一は呆れながら部屋に置いてあったソファに座ると握っていた赤いカプセルを横のテーブルに置いた。

「ん？なんや、それ」

不思議そうに赤いカプセルをまじまじ見る服部。

「なんでもいいだろ。んなことよりなんでこっちに来てんだよ。」

服部は大阪に住んでいる。近所に住んでいるのだったら蘭のように勝手に部屋に入ってきてても不思議ではないが、服部は論外だ。

決して近いとは言えない場所からわざわざ新一の家に来ているのだから。

「なんでー言われても分からん。」

（おいおい……）

新一は心の中でも呆れるしかなかった。  
分からないでこられても困る。

「なんか、嫌な氣して来たんや。ほら、俺即行動派やから！」

ごろんとベッドの上で横になると、服部は横目で新一を見た。

嫌な氣、か……。確かに間違っている訳ではない。

「……このカプセル飲んだら、元の姿に戻るんだよ。」工藤新一  
の姿にな……。」

テーブルの上にポツンと一つ置いてある赤いカプセルを指差しながら言った。

「なんやと!？」

服部は勢いよくベッドから起き上がり、目を見開きながら新一が指を指してくカプセルに目を向けた。

「それ、飲んだらもう一生”江戸川コナン”に戻らへんのか？」

「ああ、多分な。」

驚きの中に嬉しさがこみ上げてきた服部。

やっと戻れるんや。工藤新一に…俺の最高の敵に。

ふと服部は新一を見た。

「工藤……?」

新一は赤いカプセルを見ながら悲しそうな表情をしていた。  
服部はなぜだか分からなかった。

今まで元の姿に戻るために黒の組織を突き止めそしてやっとの思い  
で、組織を壊滅させたのだ。

そして、今工藤が見ている先には元の体に戻る薬がある。  
なのに、

(じゅっつ悲しそうやんけ……。)

薬を見る工藤の姿はまるで消えてしまいそうだ。

「おい、工藤。」

心ここにあらずという言葉は今の新一にぴったりの言葉だ。

服部は新一を呼んだが、聞こえてないのか返事はしない。

「……………」

「おいっ!」

「あ?……ああ、なんだ?」

やっと気づいたのか新一の視線は服部に向いた。

### 第三章 工藤新一へ戻る時。

「なんでもないわ。」

本当はなぜそんな悲しい顔をしているのか聞くつもりで工藤を呼んだが……

俺に顔向ける時、元の表情に戻しやがった……。

さっきの悲しい顔は一瞬で消され、今はいつもの顔に戻ってしまっていた。

「まったく……あ、そいやあ、今日泊まっていくんだろ？」

「そやなー…、今から帰るとしたら大変やから……。」

服部は被っていた帽子を脱ぎベッドに置く。そしてここまでするのに疲れたのかまたベッドに横になった。

多分、バイクでここまで来たのだろう。

「泊まってけよ」

「そうさせてもらっわ、おおきにっ！」

服部はそう言うと、疲れたのか横になり目をつぶった。

「服部？」

新一は声をかけるが反応はなく、正しい寝息が聞こえた。

「ったく……」

こんな数秒ですぐに寝れるなんて、羨ましい奴……。いや、それとも相当疲れていたのか？

新一は立ち上がるとソファーにたたんで置いてあった毛布を静かに服部にかける。

そして、部屋の電気を消すとテーブルに置いた薬を持ち静かにドアを開け部屋を出て行った。

新一の向かう所は、もう一つの自分の部屋。

あそこには工藤新一の制服や服が置いてある、いわゆるクローゼットのような部屋。

キー……

その部屋に入ると窓から月明かりが差し込んでいて十分眩しかった。なので、部屋の電気は付けずにスーツを取る。

工藤新一の頃よく着ていた黒色のスーツ。このスーツによく合う黒いネクタイは蘭がくれたものだ。

そのスーツを短い手足に通した。

「でっけー……」

今の姿ではダボダボ過ぎる。向かいに置いてある鏡にうつる自分の姿を見て苦笑いをした。

「まっ、今から元の大きさに戻るんだし……いつか。」

そう。なぜわざわざ大きさを服に着替えたかというとベルモットにもらったあの薬を今から飲むからだ。

さっきまで着ていた服では大きくなった時破れるだろう。

「飲むか。」

新一はそう言うと薬を口に入れた。そしてあらかじめ用意しておいた水を口を含む。

と、同時に

——ドクンッ

「……ッ!?!」

激しく心臓が鼓動をうった。

あまりにも早すぎる薬の効果に新一は驚いたが、だんだん激しくなる心臓の鼓動に激痛が頭を駆け巡る反動でその場に倒れ込んだ。

「……はッ……」

苦しい……自然と手は心臓を服の上から押さえていた。

冷や汗が流れる。苦しさと体中に流れる激痛が呼吸をしづらくしていた。

「はっ……」

息が……

そう思う頃にはもはや江戸川コナンの姿ではなくなっていた。

「……く、そ……」

新一は自分が元の姿に戻っている事に気づいていない。ただ、上手くできない呼吸の苦しさを、強く目を瞑りながら必死に我慢した。

（息が……出来ねえ……）

薄れていく意識を必死につなぎ止めようと頑張るが、それは叶わなかった。

「……ッ……」

薄れていく意識の中

「……工藤ッ!!」

聞き慣れた声がかすかに耳響いた。



## 第四章 心配

——パリンッ！

「んー……？」

何か割れた音が、服部の寝ていた部屋にまで響いた。その音で服部は目を覚まし上半身を起こす。

部屋は暗く工藤の姿はどこにもなかった。

「なんや、さっきの音……」

服部が気になったのは自分の眠りを邪魔した何かの割れる音。工藤がコップでも割ったのだろうか。

（あー………気になってしゃあないやんけ。）

服部は仕方なく部屋から出た。

「どこに居るんや。」

こんなデカイ屋敷みたいな家、手当たり次第に探しても時間がかかるだけだ。

と、思ったその時

”…………く、そ…”

一番奥の部屋から、工藤の声が聞こえた。小さすぎてあまり聞こえなかったが、確かに工藤の声だ。

「工藤？」

その部屋のドアを開ける。と、部屋には苦しそうな顔をした工藤新一が倒れていた。

「く、工藤……ッ!」

その姿を見て慌ててそばによる。一瞬、小さい姿の江戸川コナンではなく元の姿の工藤新一になっているということにも驚いたが、工藤の意識がないことに、凄く焦った。

「工藤ッ!おい、工藤ッ!」

強く目を瞑りびくともしない。額には汗がにじんでいた。

服部は素早く脈と呼吸を確認する。

「大丈夫そやな……。」

呼吸は弱いが脈は安定しているので、一先ず安心だ。

気を失っている工藤を静かに肩と腕で支えながらさつき服部が寝ていた部屋のベッドで寝かせた。

## 第五章 再会

一方、毛利小五郎探偵事務所では酒に酔った小五郎はソファの上でいびきをかきながら寝ていた。

そしていつもと増してうるさいいびきに蘭は目が覚めた。

「もー……」

喉が乾いたのでリビングに行っていたらテーブルの上や床にまでビールの空き缶が転がっていた。

仕方なく小五郎に薄い毛布をかけ、ビール袋に入れる。

「……何、この嫌な感じ。」

ふと、脳裏に浮かんだのは新一の姿だった。

「なんで、新一なんか……………」

嫌な予感がした。そしていてもたっても居られなくなりビニール袋を床に置き、携帯電話を開く。

そして新一に電話をかけた。

——プルルル

——プルルル

——プルルツガチャ

「あ…………、新一？」

『残念ながら工藤やないでー』

携帯から聞こえたのは新一の声じゃなくあまり聞きなれない関西弁の服部の声だった。

「え？新一と一緒になの？」

服部が新一の携帯に出たのだったら新一と一緒にのはず……

『おう、一緒やで』

「い、いまどこ？」

『“工藤ん家”や』

新一が東京に帰ってきた。やっと……

「今から行くね！」

夜中に関わらず蘭はそう言つと一方的に携帯を切り素早く着替え毛利探偵事務所を出た。

ガチャ

「やっぱり……」

玄関には鍵がかかっていなかった。だが、それはいつも通りのこと。

構わず新一の家に入る。

「お邪魔しまーす」

そして真っ先に新一の部屋へと足を運ばせた。

——トントン

「新一ー？」

ノックをしながら部屋の前のドア越しから名前を呼ぶ。

すると返ってきた声は新一ではなかった。

「はいりいや」

声の主は服部だ。

その言葉を聞きドアを静かに開けると、新一はベッドに横たわっていた。

「新一……ッ！」

遠くから見て分かるほど顔色が悪い。近くに寄ってみると息は荒く苦しそうだ。

「新一……………」

新一の手を強く握る。前より細くなっていた新一の手を。

服部は気をきかせてか部屋から静かに出て行った。

## 第六章 二人

いつも、そうだった。

新一に会えたと思ったらいきなり苦しみだし、そして……いつの間にか新一の姿はなくなっていた。

そして、変わりにコナン君がいた。小さい頃の新一にそっくりで時々見せる真剣な顔が、とても新一にしか見えなくて。

「馬鹿っ……」

コナン君は新一なんじゃないかって、ずっと考えていた。

「知ってたんだから……ずっと見守ってくれてたの……」

そしてどこかで確信したのだ。コナン君が新一と同一人物なのを。

「バー口、泣くんじゃねえよ」

いつも聞きたかった声が小さく耳に響いた。

「新一っ……」

ふと新一の顔を見ると薄く目を開け、確実に蘭の瞳を捕らえていた。

「だから泣くなって。」

蘭の流れる涙にそっと指を伸ばし優しくふく。

「嬉しいんだもんツ！ やつと、やつと新一に会えて……っ！」

更に涙を流しながらそう訴える蘭がとても愛しく思える新一は一人優しく微笑んだ。

そして……強く、誓ったように言った。

「ただいま、蘭…待っててくれてありがとな。」

「おかえりッ！」

やっと、新一が返ってきた……もう離さないと言わんばかりに新一の手を更に強く握る。

新一は優しく微笑みながら目を閉じる。

「ゆっくり休んでいいんだよ。」

「ああ……」

少ししゃべっただけで疲れたのか新一はそれ以上しゃべらなかった。

「おやすみ」

「…おやすみ……」

新一の手を握りながら軽く寄り添うように蘭は座りながら体を寄せた。

（暖かい……）

夜遅いのもあってか蘭は目がうつうつとしてきた。新一の顔をもう一度確かめ耳元に小さく呟いた。

「好きだよ、新一……」

「……俺も、蘭が好きだ。」

「えっ？」

まさか…本当に…？

「まったく……あと一回しか言わねえからよく聞けよ。」

「う、うん……」

「好きだ、蘭。」

恥ずかしそうに言う彼の姿がとても愛おしい。

「も、もう一回ッ！」

「バー口、もう言わねえよ。」

「意地悪……」

ぷーとわざとらしく頬を膨らます蘭。

「続きは明日な。」

新一は体がいきなり大きくなった反動でしゃべるのも辛かった。なので、これ以上は無理だと判断し蘭にそう言った。

「うん、おやすみ。」

蘭に新一の気持ち伝わったのか目を細めて笑うとそう言った。

蘭の言葉を聞きなぜか安心した新一はすでに深い深い眠りの中。

蘭もまた、新一の寝顔を見ながら眠りについた。

---

「良かったやないか、工藤。」

お茶をコップに入れ運びに来た服部だが、部屋には入れず、盗み聞きをしてみた。

「姉ちゃんもえかったな。」

工藤の事情を知り蘭を思う工藤の気持ちも知っていたので、やっと気持ちを伝えられた新一に服部もまた喜んでいた。

そして、気をきかせその場を去りリビングにあったソファ―に横になり、服部もまた眠りについたのだった。

## 第七章 体

「ん……………」

（眩しい…………）

太陽の光が窓から差し込みその光の明るさで新一は目を覚ました。

冬とは思えないほどの太陽の光に、新一は苦笑いをした。

そしてベッドから起きあがろうとすると

「……………ッ！」

体に激痛が走りそのせいなのか激しい目眩にも襲われたのだ。

なんとか壁に手をつきながらベッドを降りる。

「ちつくしょう……」

自分は今もこんなにも弱っていたのか。いつから、こんな一人で立つのもままならない体になってしまったのだろう。

体の一部を動かすだけで、全身に激痛が走るこの体に新一は嫌気がさした。

ズルズルと落ちていくように壁に背を任せ座り込んだ。

ここまで弱っていたのか……精神は強く保っているものの体はまるで言うことを聞かない。

「……くそッ… たて… たてよ、俺の足…」

無理にでも足をたたせながら壁に手を添えゆっくり、ゆっくり部屋のドアを開けた。

「くっ……」

激痛が体に走り足の力がぬげドアの前にまた座り込んだ。

これが自ら選んだ道だ、運命だ。今更後悔などしていない。ただ、やはり体に異常が出てくるとショックだ。

（俺の命はもって一年、か……。）

大好きなサッカーもいつかはできなくなるのか。一人ではたてなくなり車椅子生活なのだろうか。

もしそうならば、探偵の仕事だって出来なくなる。

「工藤君……」

マイナス思考ばかりしている新一の頭の上から声がした。

顔を見上げると

「灰原、か？」

元の体に戻った灰原の姿があった。口を手で覆い目を見開きながら新一の名前を呼ぶ姿が……。

灰原は新一により側にしゃがんだ。

「ごめんなさい……私が、私が……」

静かに涙を流しながらそう訴える灰原に新一は笑っていた。

「バー口、んな事俺は思っちゃいねえよ。」

灰原が考えている事はすぐに分かった。

「でも……!」

「灰原、いや……宮野。」

「え?」

「俺は、お前にやり直してほしいんだ。組織に縛られていない人生を。」

またにかつと笑いながら新一は灰原に言った。

「これからは普通の宮野志保として生きていくんだ。」

灰原は新一の言葉を聞くと驚いたように目を丸く開く。

そしてスラリと細く伸びた手足を動かし灰原は新一に手を差しのばした。

「馬鹿ね……私の事なんて、ほつといてもいいのに。」

新一は灰原の手に手をのばし握る。そして灰原は新一をひっぱる。引っ張られたおかけでよろけながらも立てた。

「ほつとけるわけねえだろ。大事な仲間なんだからよ」

こういうところが馬鹿なのよ、私は工藤君に暗い人生を背負わせた張本人なのに、攻めもしないで……本当に、馬鹿ね。

と、思いつつ灰原は小さく微笑んだ。

## 第八章 親友

「どうゆうことや、工藤。」

いきなり聞きなれた声がした。新一と灰原は声のしたほうへ顔を向ける。

そこには

「は、とり……」

腕を組み怒った様子の服部が立っていた。服部はゆっくりと新一の前にくると激しく怒鳴った。

「どうゆうことやって聞いてんねんッ！」

服部は思っていた。いつも工藤が元に戻っても風邪をこじらしてい

る程度、直ぐには具合は悪くなったりはしない。

いつもなら、体が幼児化する直前激しく苦しみですが、工藤は服部にこう言っていた。

『もう、江戸川コナンに戻らねえよ。』と……

それに、服部はさっきの灰原の言葉を聞いていたのだ。

「なんか隠しとるやろ。」

服部としては一番の親友と言っているいい工藤新一には本当のことを言っただけだった。

「服部……」

だが、新一の考えは違った。一番の親友だからこそ伝えたくない本当の真実。

一番の親友だからこそ……

「隠してねえよ。なんも、な。」

服部の目から視線を落とす。服部の目を見ていたら嘘をつくのが辛くて、思わず下を向いてしまう。

「知つとるか。お前が嘘付くときはすぐ目線を下に向けるんや。なんで隠すんや、工藤ッ!？」

新一につかみかかる勢いで服部は怒鳴り散らす。

「工藤君をせめないで……」

小さく灰原は呟いた。その言葉で服部は目を見開き静かに灰原を見た。

「工藤君は何も悪くないわ。だから、せめるなら私をせめて。」

涙をため灰原は服部に言った。

（そう、悪いのは私……）

私のせいで、二人の友情を壊したくない。私なんかのせいで……

「……………」

新一は灰原の姿を見て何も言えなくなった。

「説明してや、何起こってんのか理解できへんのや……………」

服部の悔しそうな声が耳に響く。

「服部、ちゃんと説明すつから……………」

どうせいつかはバレることだ。ならば自ら説明しといたほうがいいだろう。

## 第九章 眞実

---

「な……………」

服部に全てのことを話した。案の定、服部は驚いたように口を開け目を見開いている。

「黙ってて悪かった。」

「そない大切な事……………なんで黙ってたんやッ！」

新一は下を向き小さな呟いた。

「普通に……………いつも通りの馬鹿な服部でいてほしかったんだ。」

「なんやと……………?」

「気、使うだろ。俺の命が後一年しかないって聞いたら。」

新一はふっと静かに微笑むと、悲しい顔……いや、悲しい目で服部を見た。

「それにー……いや、なんでもねえ。兎に角今の話、聞かなかった事にしてくれ。」

”それにー……”、本当に言いたかった言葉はなぜか言えなかった。

「聞かんかった事にできるか、ポケッ！！俺は、頼りたいんやッ！！……なあ、工藤……俺、そんなに頼りあらへんか？」

急に静かになった服部は下を向いた。深くかぶっている帽子のせいで表情は分からない。

そんな服部を見て、新一は戸惑った。

「ん、なこと……ねえけど……」

「……せやったら……頼ってや。」

服部は新一は見ながら言った。

その真剣な眼差しに新一はまた戸惑ったが

「……ありがとな、服部。」

そう呟いた。

## 第十章 朝

---

「新一、おはよう」

その後、新一は下のリビングへと足を運ばせた。

宮野は一旦、博士の家に戻ってもらったのだ。

服部は和葉に電話すると言い新一の部屋に入って電話している。

「……おはよ」

新一はさっきの事などなかったように蘭に言った。

蘭はすでに起きていたのだろう。テーブルの上には朝ご飯と思われる料理が並んでいた。

「コーヒー飲むでしょ？今入れるから待ってて。」

スリッパをパタパタと騒がしく駆け足でキッチンの方へと歩んでいく蘭。

新一は椅子に座り蘭の姿を見ていた。

——ズキズキッ

（つつたく……）

こう待っている間にいきなり痛くなる頭。

わいて温まったコーヒーをカップにつっしている蘭から目をそらし、目を瞑る。

——ズキズキッ

痛みは一向に良くならない。逆に痛みが増しているようだ。

「はい、出来たわよ。」

湯煙が登るカップを新一の目の前にあるテーブルに置く。

蘭に心配はかけたくないの、頭を無理に上げカップを手にもち、まだ熱いコーヒーをゆっくり口に流し込んだ。

「……ん、やっぱりコーヒーだよな。」

コナンだった時は小学生の姿だったためにコーヒーは余り飲めなかった。

コナンの姿で何も気にせずコーヒーを飲んだのは、博士ん家くらいだよな。

蘭は向かえ側の椅子に座った。

「今日、学校行く?」

学校、かー………

元の姿に戻り、今は高校生なのだ。久しぶりに学校へ行くのも悪くない。

少し減ったコーヒーが入ったカップをテーブルに置く。

「久しぶり、行くか」

「本当?!」

なぜか驚く蘭。

「そんなに驚くか？」

「当たり前よっ！新一がいない学校……ちょっと寂しかったんだから……」

そうか、つと新一は蘭に言った。悲しそうに眉を潜める蘭の姿を見ていると胸が痛い。

「あ……、でもそれは前の話よ。今は新一いるんだもん。」

にこつと笑う蘭に新一も笑う。

いや、新一は笑うと言うよりは微笑んでいるといった方がいいのかもしれない。

ふいに時計を見ると今の時刻は6時12分。

「まだこんな時間かよ。」

意外と早く起きてしまった。学校へ行くまで時間はある。

「お風呂借りていい？」

「いいけど……」

「じゃ、シャワー浴びてくる！新一は朝ご飯ちゃんと食べてて。」

そう言うと蘭は慌ただしく椅子から立ち上がりお風呂場へと足を運んだ。

## 第十一章 小さな嫉妬

---

蘭がいなくなり、リビングには新一一人になった。

「ケホっ……」

風邪気味なのだろうか、咳が口から漏れた。

（飯、どうすっかなー…）

せっかく作ってもらった朝ご飯を食べる食欲がない。

だが、作ってくれたんだ。食べない訳にはいかないだろう。

「ゲホっ…ゴホ…」

咳が出てくる喉が痛い。

「大丈夫か？」

いきなり服部の声がした。いつの間にか新一の側に居て背中をさす  
つてくれている。

服部は眉をひそめ新一を見ていた。

「わりい…ケホっ……」

「いいんや。……それより、無理したらあかんからな。」

「わーてるよ。」

「本間に分かってるんかあ？」

服部はソファーに腰かけた。

咳が収まったので、服部に体を向ける。

「頼みあるんだけど。」

「なんや？」

「この朝食……蘭が戻ってくれるまで、完食してくれ。」

蘭が作ってくれた朝ご飯に指をさしながら服部に言った。

（本当は食べさしたくねえけど……）

せつかくの蘭の手料理を服部に食べさせるのはなんか悔しい。

「別にいいんやけど、工藤もきっちり飯食わなあかで。」

服部はソファから素早く立ち上がると新一の方へ歩いた。

「つまそうやなー……」

蘭の料理を見て目を輝かせる。じーと料理を見つめる服部に新一はなぜか苛ついた。

「んなに見んなよ。」

「は？見んと食えるやろが。」

「目瞑って食べばいいだろ。」

「工藤……まさか、俺がねえちゃんが作った手料理を食べるからって、嫉妬しとるんじゃないよな？」

にやにやしながら服部は新一に言った。

「……んなわけねえだろ、バーク。」

「素直やないなあー……」



## 第十二章 通学路

---

「久しぶりだねー、こうやって一緒に学校に行くの。」

制服を久しぶりに身につけ蘭と道を歩いていた。

なぜか蘭は制服を新一の家に持ってきたらしく取りに行かなくても良かった。

「そーだな。」

服部は工藤邸で留守番。と言っても服部はぶらぶらと米花町を歩き回るだろうが。

信号機の前で二人は足を止める。赤信号で道路は車が多く走っている。

新一の隣には出勤途中のサラリーマンらしき男が数人立っている。

「ねえ、新一。」

「ん？」

「……………昨日の言葉、本当に？」

昨日の言葉……………ああ、あれか…

信号が青になり歩き始める。

「ああ、好きだ。」

ちよつと恥ずかしさに頬を赤くする新一に蘭は言った。

「じゃ、じゃあッ……………！手、繋ぐ……………？」

蘭の突然の言葉に驚き新一は一瞬目を見開いて蘭を見た。頬が少し赤くなっている。

「ほら。」

新一は微笑みながら蘭に手を差し出す。

「え……？……いいの？」

「おめーが言っただろ。」

新一の言葉を聞き蘭は笑顔で差し出された手を握る。

（冷たい……）

新一の手を握り初めて気づいたが、新一の手が冷たすぎる。

今は冬。冷たくてもおかしくはないが、新一は家からここまでいつものようにポケットに手を入れていた。

こんなに冷たくなるものだろうか。

「ねえ、新一？」

学校はもつすこしだ。新一と手を握り歩きながら蘭は言った。

周りは同じ制服を着た生徒達が歩いている。

「ん？」

「……もうちょっとで学校だね。」

「そーだな。」

言いたい事は違ったがなぜか言えなかった。

（新一）

何を隠しているの？

## 第十三章 学校

---

「きゃーッ!! 工藤先輩ッ!!」

「工藤が帰ってきたっ!」

学校の校門の前。帝丹高校の生徒達が新一と蘭を囲んでいた。

「えッ!? 本物!?!」

という声まで耳に入ってくる。多分一年なのだろう。新一を見るのは初めてなはず。

「すげえな……」

「本当……」

新一と蘭はというと迷惑そうに、ただどことなく嬉しそうにしていた。

「ちょっと、ちょっとお、避けなさいよッ!!」

聞きなれた声が耳に響いた。校門の前に集まった人混みの中を一生懸命かき分け新一の前にたった。

「そ、園子……」

新一の顔が引きつった。その原因は園子だ。

眉を潜めお怒りの様子……。

「今までどこほつつきまわってたのよッ! 蘭はずっと新一君の事待

ってたんだから！……あれ？ちょっと聞いていいかしら。」

「……あ？……いいけど……」

「貴方達付き合ってたんの？」

「あ……」

園子の言葉に顔を真っ赤にしたのは蘭だった。

「ちょっと……どういこと！？」

「園子落ち着けて……」

「これが落ち着いていられる！？」

「話は教室で……な？」

「……わかったわよ。」

やっと観念してくれたみたいだ。

三人でクラスに向かう。蘭が言っていたが、蘭と園子、それから俺は同じクラスらしい。というのも今回はクラス替えはなしだったようだ。

なぜかはわからないが……

## 第十四章 名物カップル

---

久しぶりのクラスの前。場所は変わっているが、中から騒がしい声が聞こえ懐かしくなった。

ゆつくりとドアを開けクラスの中に入っていく。

「工藤ッ！！」

「やっと、戻ってきたか！！」

「待ってたんだぜ。」

懐かしい声に暖かい言葉が飛んできた。

やはりクラスでも新一はクラスメイトに囲まれる。

「ただいま。」

新一の一言でクラスは一気に湧き上がった。

しばらく自分の席で久しぶりに会った友達と話し込んでいた。が、園子の一言で会話は中断した。

「蘭と新一君って、付き合ってたの？」

さらーっと言った園子の言葉でクラスがある意味わいた。

「どづなのよ。」

「っ、付き合ってた……ます……」

顔を真っ赤にし、下を向きながら蘭が言った。

( やっべ…… )

その蘭の表情がとても愛おしく見える新一。

「マジ！？ やつとゴールインしたじゃあんツ！」

「高校生探偵工藤新一と、帝丹高校一番の美人との……帝丹高校名物カップルだなッ！」

「ちょっと大げさじゃねえか？」

新一は呆れた顔で腕を組ながら言う。

その後先生が来てみんな席に戻されたが、授業が始まって冷やかしの声が新一を呆れさせた。

が、やはり久しぶりの学校、クラス……そして高校の授業はやはり懐かしくそして新鮮なものでもあった。

こういう時は自分の命の期限なんて、忘れられた。

だが、授業が始まりふと窓の外を眺めると思い出してしまう。

（いつまで、見れるんだ……）

この、窓の外に広がる蒼々とし、白い雲が広がる綺麗な空を。

見れなくなる日は近い。



## 第十五章 約束

---

新一が学校にいる一方、亜笠家では灰原がたんと動いていた。

「哀くっ……いや、志保君と言った方がいいのかのう……」

白衣のポケットに手を入れながら博士は言った。灰原は一旦手を休め、沸騰したコーヒーを二つのカップにうつす。

そして、カップを持ち博士に近づいた。

カップをゆっくりテーブルに置く。

「哀でいいわ。」

そう言い灰原は椅子に座りすらりと伸びた足を組む。

それを見た博士もつられて向かえの椅子に座った。

「じゃが、今の君の姿は志保君……哀君では……」

「いいのよ、博士。私はこれからも”灰原哀”で生きていくつもりだから。」

「なぜじゃ？」

灰原は博士の問いに少し微笑みながら言う。

「私の居場所は”灰原哀”にあるのであって、”宮野志保”にはないわ。……それにたくさんの思い出が詰まっているのは、灰原哀だもの。」

その微笑みは幸せを感じているような微笑みだった。

「哀くん……」

「ところで博士。さっき私を呼んだわよね？」

「ん？ああ……—いいのかな？…病院へ連れて行かんくて…」

博士の言葉を聞きながらカップを片手に持ちコーヒーを口の中に少し流し込む。そしてカップを口から離す。

「良くはないわ。……けど、工藤君と約束したのよ。」

「約束？」

「ええ……」

灰原はそう言つと目をつぶった。

## 第十六章 医者

そつ……約束したのよ。

絶対に守ってもらわなければ困る、約束を……

---

さつき、工藤君が学校へ行く前。私と工藤君は二人きりになった。

服部は誰かに電話すると言って近くの部屋に入っていった。

服部がいなくなったのを見て、灰原は口を開いた。

「せめて、病院へ行つて」

病院へ行けば、少しでも進行を遅らせる事が出来るかもしれない。

新一はそれを聞くときっぱりと言った。

「病院は行かねえよ。」

その言葉を聞き灰原は目を見開く。

「どうして！？進行を遅らせる事が出来るかもしれないじゃないッ！」

思わず声を上げてしまった。

新一は灰原の言葉を聞きゆっくり目を瞑る。

「…病院に行けば進行を遅らせる事が出来るかもしれない。……だけれどな、限られてしまうだろ？生き方が。」

「生き、方……？」

新一は壁に重く感じる体を任せながら、ズボンのポケットに両手を入れた。

その様子を灰原はただ、見ていた。

「ああ、進行を遅らせるためには治療が必要になるだろ。」

「ええ」

「入院、しちまうだろ？」

「……っ……」

新一は瞑っていた目を薄く開け灰原を見た。

「生き方が限られちまう。」

「そうね……そこまで、考えてなかった……」

私は、ただ少しでも長く生きてほしい一心で言っていた。だから、そこまで考えてはいなかった。

「それによ。みんな俺が死ぬ前提で話してっけど、俺死ぬ気ねえから。」

そう言いながらにこって歯を見せながら言う新一。

「そうね。じゃあ、一つだけ約束して。」

「なんだ？」

灰原は新一に近づき言った。

「私が貴方専用の医者になるわ。もちろん博士の家の地下を診療所としてね……。そして工藤君は毎日診察へ来るのよ。」

灰原の言葉を聞き嫌そうに顔をしかめた。

「げっ、毎日って……」

「あら、何か不満でもあるのかしら。」

「いや……ねえけど……」

（毎日灰原の診察受けた方が、寿命縮みそうだが……）

圧倒的な灰原の視線となぜか言い返せない言葉の迫力で従わざるおえない。

「じゃ、私博士の所へ戻るわ。……何か合ったら直ぐに連絡しなさいよ。」

灰原はそう言うとなスタスタと階段を降りていった。

そして灰原が完全に工藤邸から出たのと、博士の家へ入っていくのを窓から確認した。

「ありがとな……」

小さく、もちろん灰原へなど聞こえない感謝の言葉を窓から見える  
博士の家を見ながら呟いた。

## 第十七章 帰り

---

時と場所が変わって帝丹高校では、やっと授業が終わり放課後になっていた。

「新一ー、帰ろ？」

「ん？ああ……」

頭が痛いせいかー日中ぼーとしていて久しぶりの高校での授業も全くと云っていいほど頭に入ってこなかった。

自分の席から立ち上がり目の前にいる蘭の側による。そして二人は歩きだした。

そして外へでると朝より風が冷たいのが分かった。息をすると白い煙が出てくる。新一は口元をマフラーで隠す。

「あれ？あの車、博士のじゃない？」

蘭の言葉に顔を上げた。そして校門の前に止まる車、あれは博士の車だ。目立つ黄色い博士自慢の車。

小走りで車に駆け寄る蘭に、新一はゆっくり歩む。

「やっぱりっ！」

車の側まで行った蘭はガラス越しに見える博士の姿に笑顔を浮かべた。蘭に気づいた博士はいつものように微笑むと車から出てきた。

だが、出てきたのは博士だけではなかった。後ろのイスに座っていたウェーブで白衣を羽織った新一にとっては見慣れた人物も降りてきたのだ。

その人物は蘭を少し見ながら小走りで新一にかけよってく。

「久しぶりじゃのー蘭君。」

女の蘭から見ても綺麗な女性をずっと無意識で見ていた。だが、博士の一言で意識は戻り博士を見る。

「本当、久しぶりっ！」

嬉しそうに微笑む蘭を見た博士もまた微笑む。この寒さも吹っ飛びそうなくらいの笑顔に癒される。

「何しに来たんだよ。——灰原。」

新一は目の前まで来た灰原を軽く睨む。

「あら、せっかく迎えに来てあげたのに嬉しくないようね。」

白衣のポケットに片手を入れながら灰原は言った。この奇妙な光景に周りの生徒はなぜかささと直ぐに帰っていく。

「当たり前だろ……」

こんな事をされたら、ある意味感の良い蘭に気付かれてしまうかもしれない。

そう思うとさらに頭痛の痛みは増した気がする。痛みで目が霞む。とっさに片目を軽く擦るが治りはしなかった。

「工藤君？」

新一の行動を不安に感じながら灰原は言った。

「んだよ。」

——ズキッズキッ

何もないように灰原に答えるが、ますます頭の痛みは鋭いものにな  
っていく。

「大丈夫？」

いつも無表情な灰原だが、少し心配そうな表情が見えた。

「平気。それよりんな格好でここに居たら風邪引くぜ？どーせ俺、  
車に乗せられるんだろ。だったらさっさと車にいこうぜ。」

と言いながら心配かけじと車に歩き出す。車の側では久しぶりに会  
った蘭と博士が楽しそうにしゃべっていた。

「蘭」

蘭に近付くと新一は呟いた。新一の言葉を聞き博士に向けられてい  
た瞳は新一に向けられる。

「何？」

風が少しふいた。蘭の長い髪の毛は静かに風になびいている。

蘭だけではなく、新一の隣へ来た灰原の茶色のウェーブも短いがなびいていた。

「博士の車、乗ってください？」

「博士がいいんだったら……」

蘭は遠慮がちに博士の顔を見ながら言った。博士はいつものように微笑む。

「良いに決まっとするじゃろ。さっ、行くかの。」

博士はそう蘭に言う。ありがとう、と博士に言う蘭。そしてみんなで車に乗り込んだ。

運転席はもちろん博士、博士の隣は新一で後ろは蘭と灰原が座った。



## 第十八章 車

---

「ケホっ……………」

車の中はやけに静かだった。いつも通り灰原は無口だが、蘭もなぜか口を開かない。

ミラーから見える蘭に目をやると下を向き何かを考えている様子だ。何を考えているのだろう。もしや、気付かれたのか？俺の体調が……

「大丈夫か、新一。」

運転をしながら博士は言った。安全の為博士の視線は真っ直ぐ外に向けてある。気を使ってか博士の一言は新一にしか聞こえないものだった。

「平気」

新一もまた、蘭に聞こえないくらい小さな声で呟く。一応聞こえないかミラーを通して蘭の表情を確認した。

さつきと変わらず下を向いている。

「博士」

「なんじゃ？」

「少し、寝ていいか？」

車に揺られていると眠気に襲われる。目を瞑りながら新一は博士に言った。

博士はちらつと新一の様子を見る。

マフラーで隠れた口元だが顔色が優れない事は目に見えていた。もとから白い肌は顔色が悪いせいか更に白く見える。

「少し、眠った方がいいじゃろ」

「着いたら起こしてくれ……」

新一が眠りにつくのはすぐだった。

## 第十九章 蘭と哀

---

眠った新一は少し下を向いていた。新一の黒髪は車が揺れるにつれ揺れている。

「新一？」

蘭は後ろから声をかけた。だが、返事は帰ってこない。

蘭は考え事をしていたので、全く新一が眠った事に気づかなかった。

「彼なら寝てるわ。」

新一の代わりに答えたのは灰原だった。車の中でも足を組み光景が次々変わる窓の外を眺めながら言った。

「授業中も寝てたのに……また、寝ちゃった。」

「授業中にも？」

いきなりの灰原の問いに蘭は少し戸惑った。だが、真っ直ぐ目を見  
てくる灰原の姿。

「え？あ、はい。前から授業を真面目に聞く奴ではないので気にし  
てなかったんですけど……」

「そう……」

（哀、ちゃん……？）

その姿はまるで哀ちゃんにそっくりだった。姿形だけではない。喋  
り方や灰原の周りに流れる入りがたい空気。

全部、似ていた。

「あの……」

「何？」

「名前、……聞いてもいいですか？」

灰原は迷わず答える。

「灰原よ。」

灰原のウェーブが揺れ蘭の丸くなった瞳を灰原の瞳が捉える。

「……やっぱり、哀ちゃんでしょ？」

「ええ、灰原哀。それが私の名前。」

特別驚きもしなかった。新一がコナン君だということを確信していたから。灰原の事も驚きはしない。

「新一、具合悪いのかな？哀ちゃん、何か知ってる？」

小さかった頃と変わらず接してくれる蘭に今度は灰原が瞳を丸くした。

（お姉ちゃん……）

思い出したのは、お姉ちゃん。蘭さんはお姉ちゃんになぜか似ているから……どうしても重ね合わせちゃう部分がある。

「……知らないと言えば嘘になるわ。」

灰原の瞳が悲しそうに伏せた。

「新一、私に何か隠しているの。それと哀ちゃんが言っている事、関係あるの？」

灰原は迷っていた。

言うべきではない。工藤君が蘭さんに直接伝えるまでは。だけど工藤君、全く伝える気なんかないはず。

自分の事で負担をかけさせたくない、という言葉用工藤君の口から聞いたことがある。

だけどー……………

灰原は目を瞑りながら口を開いた。

「貴女には知る権利があるわ」

灰原は下を向きその表情は無表情。だが、新一が灰原の今の表情を見ていたらこう言うだろう。

「んな顔するな」……。今の灰原の表情の意味を分かるのはこの世でただ一人だけ。

「工藤君は……」

## 第二十章 信じられない事実

---

「工藤君は——……」

灰原の言葉が蘭の頭を何度も何度も駆け巡った。まるでスローで言葉が過ぎ去っていく。

「今のままだったら、間違いなく一年後にはいないわ。」

一年後にはいない？また、私は待たされるのだろうか。……いや違う。そんな甘いものではないのは分かっている。だが、信じたくない自分がいた。

「今のままだったらね……」

「どういう意味……？新一が居なくなるって……」

もはや考える思考もストップしてしまったようだった。

聞きたくないのに、耳を塞ぎたくなるような事実なのに、聞かずにはいられない。

「ちょ、哀君……！」

前の席から博士の焦る声が車の中に響いた。

「悪いけど、博士は少し黙ってて」

灰原は博士を見ながら言った。

「蘭さん。貴女、支えられる？徐々に弱っていき、弱々しく笑う工藤君を……貴女は隣で支え、笑っていられる？」

灰原の真剣な質問に蘭は目を見開いた。

「……嘘じゃないんだ。哀ちゃんの言っていること。本当に、新一は……」

灰原のその瞳からは涙が流れていた。感情を表にあまり出さない灰原が顔を歪ませ涙を流している。

「う、めんなさい……私のせいなの……工藤君の……人生を狂わせたのは、私のせいなのよ……」

両手で顔を押さえ涙を流す灰原に蘭は俯いた。

「新一は……」

小さく呟きながら言う。

「新一は、哀ちゃんが自分の事を責める事は望んでいないと思う。……事情は分からないけど、絶対新一は誰のせいだとか……思ってないわ」

蘭は顔を上げると、灰原ににっこりと笑いかけた。灰原は両手を顔から離し目を見開く。

「工藤君が蘭さんの事が好きな理由……分かった気がする……」

「え？」

「いいえ、なんでもないわ」

灰原も涙を流しながら笑顔になった。蘭も……

けれど、蘭は深く深く心が裂かれた気がした。そして笑いながら静かに涙が頬を伝わっていく。

「だめ……泣いたら。私が泣いたらだめだよ……」

自然と伝ってきた涙を必死で止めようと手で涙を一生懸命拭いていく。だが、それを止めたのは灰原だった。

「泣いていいの。泣きたい時は、泣いたほうがいいわ。」

この言葉を聞き蘭は遠慮がちに涙を流した。前で寝ている新一を後ろ姿を見ながら……何度、何度新一の名前を小さく呼んだ。

## 第二十一章 到着

---

「おい、工藤」

肩を誰かが揺すってくるのを感じ目を薄く開ける。車は動いてない  
ようで、エンジン音はしない。

肩を揺すってきた人物に目を向けた。

「は、っとり……」

「ついたで。ほら、さっさと立ちいや」

もう、付いたのか。服部がなぜここにいるかは不明だが、どうせ車の音を聞き工藤邸から出てきたか、博士が灰原に起こしてこいと言われたかどちらかは目に見えている。

車から外へでる。冷たい風がビューと吹き体が冷たくなった。

「新一」

後ろから声がした。

「蘭……？なんでいんだ？」

車で送ってもらわなかったのか…制服は着たままだが、なぜかその手にはどこかへ泊まりに行くかのようにバックが持たれていた。

「私今日から新一の家に住む。いい？」

「は？」

いきなりの事で戸惑うが荷物を重そうに両手に持つ蘭に駆け寄っていった。そして、荷物を持つ。

「あつ、持てるから大丈夫なのに……」

「バー口、んな重そうに持ちながら言っ たって説得力がねえよ。」

「ありがとう……」

遠慮がちに言う蘭。

「まあ、寒いから中入ろうぜ」

新一はそう言っていると工藤邸のドアを鍵で開け蘭の荷物を広い玄関に置く。

寒い外でなぜ工藤邸に住むか聞くのは蘭が風邪引いたらいけないので後で聞くことにした。

服部も後ろから工藤邸へ入っていった。

## 第二十二章 二人の居候

---

「んで？なんでいきなり一緒に住むなんて言うんだ？」

工藤邸に入った後三人はリビングに集まった。服部がずっとこの家に居たせいか暖房が効いていて暖かい。

ソファーに座る新一の隣に蘭が座っている。服部は床に胡座をかきながら読みかけだったらしい推理小説を読み始めた。

あの本は工藤邸の中にある馬鹿デカイ本棚にあった中の一つだろう。

「駄目？」

駄目？、と言われて駄目と言える訳がない。

大きな目を向けてくる蘭に新一は戸惑った。

「駄目じゃねえけど……」

「本当！？ありがとう！一部屋借りるね。」

新一の一言で蘭は嬉しそうに笑った。この様子だと、もうこの工藤邸に住む事に決まってしまったようだ。

新一は諦めたようにため息をはく。

蘭はそんな新一を無視しリビングを出て行った。多分、余りに余っているこの家の部屋に持ってきた荷物を置きに行ったのだろう。

「あ、工藤」

何かを思い出したかのように読んでた本から目を離し顔をあげた服部。

「なんだよ」

「俺も当分ここに住むさかい、よろしゅうな！」

にかつと白い歯を見せながら笑い服部に新一は目を丸くする。

「どいつもこいつも……はー…」

服部に何を言っても無駄だと分かっているので反論はしない。

また、新一は溜め息をついた。

## 第二十三章 検査

---

「きたぜー。」

新一はあの後、阿笠邸に呼ばれた為、博士の所へ来ていた。

「あら、早かったじゃないの」

「あつたりめえだろ、隣なんだから」

「それもそうね。さっ、付いてきて。」

灰原に呼ばれたのは体の検査をするためだ。

階段を降りていく灰原に付いていく。降りた先にある部屋はいつも灰原がアポトキシン4869の解毒剤を作っていた場所。いわば彼女に取っての小さな研究室だ。

「へー……」

その部屋は今、普通の病院の診察室のようになっていた。

きちんとしたベッドも置いてある。血圧計なども。本格的な医療道具はないがここが個人で作った診察室ということは驚くだろう。

「ほら、早く座りなさいよ」

「へいへい」

白衣姿のままの灰原は椅子に座りながら言った。新一はめんどくさそうに返事をする、灰原の真っ正面にある椅子に座る。

目の前にいる灰原の手には注射器が握られていた。

「腕」

腕、だけという医者、看護師がいるだろうか。灰原の言葉を聞き新一は苦笑いをした。

黙って袖を捲り腕を目の前のテーブルに乗せる。

手際よく注射器を腕の血管に刺す。血を取っているのだろう。その後もいろいろ検査をした。

「ありがとうな、灰原。また、よろしく。じゃあな」

全部の検査を終えた新一は博士の居るリビングに戻っていた。検査が終わったので、すぐに工藤邸に戻ることにした。

「当たり前の事をしたまだよ。それより明日も忘れず来る事。わかった？」

「わかったわかった。じゃーな」

新一は阿笠邸を出て行った。それを見届けた灰原はまた階段を降り診察室に戻る。

椅子に座り新一の検査結果をパソコンに打ち込んだ。

「……………進行が、早い……」

検査結果をいち早く見ていた灰原は小さく呟いた。

## 第二十四章 母親との再会

---

「新ちゃああん!!」

朝、工藤邸に高い声が響き渡った。

工藤邸に蘭と服部が居候することが決まってから3日たった。

「んだよ……」

体の痛みや頭痛で早く目を覚ましてしまい起きていたが、リビングのソファーの上で寝てしまっていた新一は目を覚ました。

時計を見るとまだ6時丁度。蘭も服部もまだ寝ている。今日は土曜

日、蘭は学校が休みだ。

こんな時間に一体誰だろう。それにさっきの声……

「気のせいか……」

そう一人で納得し、また目を瞑り寝る体制に入る。

が、それを邪魔したのがさっきの声の主だった。

——バンッ……！

ドアが勢い良く、大きな音を出して開いた。新一は驚き、ドアの方を見る。

「か、母さん……」

そこには新一に迫ってくる工藤新一の母、工藤有希子の姿があった。

——ギョッ！

「うえ！？」

いきなり抱きついてきた有希子に驚き変な声が出た。

端から見たらなんて恥ずかしい光景なんだろうか。

ていつか、どう思われるのだろうか……

新一は急いで自分に抱きついている有希子を離す。

「……母さん……？」

離して分かった。母さんが、泣いてる。

「お、おい……」

いきなりのもので驚きと戸惑いを隠せない。

「新ちゃん…うつ…新ちゃんっ！」

「どあッ!？」

いきなり大声で新一をソファに押し倒した有希子。

「落ち着けよ、母さん」

新一がそう言う和有希子は静かに床にへたり込んだ。

「なんで日本にいんだ？」

「……昨日の夜、新ちゃんが死んじゃうかもしれないって連絡が来たから日本に来たのよ……だけど、嘘だったよね！どこも怪我してないし……」

「ははっ……」

嘘だったら、怪我だったらどんなに良いものか……そう思いながら新一は苦笑いをした。

「あら……だけど、顔色が悪いわよ？ちゃんと寝てる？食べてる？それより新ちゃん！成長するの早いわねー……まだ小さくなってるから一年ちよつとしかたってないのに……もうそんなに背が伸びちゃった」

（ははっ、んなわけねえだろ……）

新一は久しぶりに聞いた母親の天然さにまた、苦笑いした。



## 第二十五章 久々の朝食

---

母さんが久々に作ってくれた朝食がテーブルに並んでいた。家にあるもので作ったのだから、今は蘭が毎日買い物へ行っていたため十分食料、材料はあったそうだ。

熱いコーヒーを啜る新一をよそに新一の母、有希子はというと……

「新ちゃん、見てみてーっ！私もまだまだ似合うじゃない！」

くるりと一回転。はいているスカートがなびく。

「あのよー……ちゃんと聞いたのか？着ていいかどうか。」

「あら、もちろん聞いたに決まってるじゃない。蘭ちゃん、似合う？」

有希子が嬉しそうに、そして楽しそうにしている訳は

「似合います、似合いますっ！このまま学校へ行ってもいいくらい……」

蘭は笑顔で言った。

そう、有希子は朝食が出来たので蘭を起こしに行ったはずがなぜかリビングへ戻ってきた時、蘭の制服のブレザーを着ていたのだ。

「もう……照れるじゃない！でもこうして制服を着ると、昔に戻ったみたいだわあー…あ、優作に見せなきゃっ！」

超ミニスカートの制服を身にまとった制服姿の自分を携帯のカメラで撮影。

その姿を新一と蘭は見ていた。

「ふふっ、新一のお母さん楽しそうだね」

「まったく、歳考えろってーの……」

呆れながら有希子を見る新一。それを蘭は楽しそうに見ていた。

——ガチャ

リビングのドアが開いた。そこには欠伸をしながら眠そうに目を擦る服部の姿。

服部の視線は自然と有希子へ。

「あー……」

気まずそうに頭をポリポリかく。

そりゃそうだ。起きてみたら服部にしては得体の知らない人がブレザーを着て写真を撮っているのだから。

有希子は服部に気づいて、携帯を閉じた。そして服部に近づき口を開く。

「新ちゃんのお友達さん？」

新ちゃん、という言葉に服部は目を丸くした。

服部は新一に助けを呼ぶ目線を送った。だが、蘭と喋り込んでいて助けてくれそうにない。

服部は諦め口を開く。

「お友達言うか、親友なんやけど……」

「あらっ！親友さんなんだあ。名前は？」

「服部言います、服部平次。」

「平ちゃんね、息子と仲良くしてくれていつもありがとう。私も仲良くしましょうねっ！」

（なんや、なんや…平ちゃんって……ごっつ格好悪いやんけ…）

そう思いながらも服部は”息子”と言う言葉に敏感に反応した。

「どっかで見たことあると思ったら……工藤の母さんなんかっ！制服着とったらわからなかったわあ」

「ふふつまあ、みんなで朝ご飯食べちゃいなさい。私、着替えてくるからーっ！」

リビングを出て行く有希子を見届けると服部は急いで新一達へ近づく。

「飯食ってまえ言っとったで、新ちゃん」

顔をにやつかせ服部は言う。新一はすかさず服部を睨む。

「んだよ……」

嫌そうに服部を睨む新一に、服部は無視し、朝食が並んでいるテーブルに座る。

ずらりと並んだ朝食に服部は唾を飲んだ。

「うまそうやなあー……」

さすがだ。

服部家では和食が多い。だが、工藤邸は洋食が多い。

「いただっきまーす」

服部は箸を手に取り口に料理を運ぶ。

蘭も料理を食べ始めるが、新一は食べられずにいた。

「わりい、ちょっと博士に呼ばれてっから行ってくる」

逃げるようにその場を後にする。

## 第二十六章 逃げ

---

「はー……」

逃げるようにやってきた阿笠邸のソファで横になる。

「大丈夫か、新一」

博士は白衣に手を入れ近付いてくる。

「出来たわよ」

灰原は持ってきた熱いお茶をテーブルに置いた。

眠い。兎に角、眠い。そして食欲が全く湧かない。体も朝からダルク動く気すら、口を開く気すらなくなっていた。

目を堅く閉じた新一は次第に夢の中へと行きそつになる。だが、それを新一の脳裏は拒否をした。

寝てはダメだ。寝てしまえば、生活が狂う。

必死に重たい目を薄く開き灰原を見た。心配そつに眉を細める灰原。

「んな顔すんなよ……」

灰原は、はっと目を開いた。

やっぱり私の気持ちを分かってくれるのは貴方だけ……

灰原は無意識に新一のおでこに手を当てた。

「貴方、冷たすぎるわ。暖房が付いているこの部屋で、なぜ……こんなに冷たいの？」

新一はふつと笑う。

「さみいだけだ」

「そう……」

——ピンポーン

阿笠邸に誰かが来たようだ。チャイムが一回、部屋に響いた。

「わしが行ってくるわい」

博士は笑顔でそう言うと、ドアの方へ歩き始めた。

——ガチャ

博士が鍵を開け、ドアを開くとそこには蘭と有希子の姿があった。

「おお、戻ってきとったのか」

有希子の姿を見た博士は嬉しそうに、そして久々だというような顔つきで蘭と有希子を出迎えた。

新一は目をまた瞑った。

（やっぱ……こんな事してっと、いつかはバレるよな。）

蘭にも、そして母さんにも。

灰原は新一の側から離れ地下室へと何も言わずに降り立った。

## 第二十七章 倒れ

---

「ねえ、新一」

蘭と有希子が阿笠邸に来てから一時間。有希子は優作が日本へ来るということ、空港まで迎えに行った。

蘭と新一は工藤邸へ戻り、いるはずの服部はいない。

服部から電話で「和葉がうるっさくてかなわないねん。せやから、一旦帰るわ。あ、すぐ来るさかい！待つとれよー」と一人テンション高く言っていた。

そして今。工藤邸には新一と蘭、二人しかない。なぜか気まずい空気が部屋を取りまわっていた。

「なんだ？」

「待つてるから。新一の口から真実を話すの……待つてるから……」

「え……？」

蘭の言葉に新一は目を見開いた。

気づかれたのか…？

「だから、無理…しないで？」

蘭は眉を潜め、新一を見る。新一は蘭の瞳を見てられず、下を向いた。

「バー口……無理なんてしてねえよ。ただ、前に進んでるだけだ…」

そう、無理をしていないかと言われるとしてないわけじゃない。だが、前へ進むには多少の無理も必要。

それじゃなきゃ、神経を…心を強く保たなきゃ簡単に折れちまう。

「知ってる？前へ進む時、少し足を休めたっていいんだよ。また、進めばいいんだから！」

にっこりと笑う蘭。新一は顔をあげた。

「フっ……ほんと、そうゆー所好きだぜ………」

「え………？」

——ドサっ……

「し、新一ッ!？」

新一はゆっくりと膝を付き、口を手で押さえ倒れていった。  
そして苦しそうに咳をする。

「ゲホッ!!ゴホゴホ……ぐっ……」

——ポタっポタ

口を押さえた指の隙間から真っ赤な血が流れた落ちた。

蘭を目を見開き、新一に駆け寄る。

「新一！？新一ッ！！」

呼びかけてもなお、新一は苦しそうに咳をするだけ。

なんとかできないものかと、蘭は新一の背中をさする。

「ゴホっ！ゲホ……はっ…ゴホゴホ…！」

流れ出す血は止まらない。

新一の姿を見ていた蘭の大きな瞳にいつぱいの涙がたまっていった。

「ゴホっ……」

やっと収まった咳。

「ケホ……はっ……泣く、なよ……」

へらっとな新一は笑う。

「な、かせる為に……ケホケホっ……黙ってた訳じゃねえから……」

泣かせる為ではない。

新一はとても重い瞼を素直に下ろせざるおえなかった。

泣かせる為なんかじゃない。

蘭の……あの素直な笑顔が見たいから。誰の事も幸せに出来てしま  
う笑顔が見たいから。黙っていた。

他人の事も自分事のように泣いちゃうお人好しの蘭に……言えるわ  
け、なかった。

意識が遠のく。聞こえたのは、俺の名を呼ぶ声だけ。

## 第二十七章 強い言葉

暗い、暗い空間。

何もない。あるのは己の姿形のみ。風も、ましてや建物もなにものもない場所（空間）に新一はポツリと一人立っていた。

”新一……”

聞き覚えのある声。

耳を澄ます。

”新一”

この声。思い浮かんでくるのは、あの人だけだった。

そう、泣き虫で心が強く、そして脆い。直ぐに崩れていってしまい  
そんなそんな少女。だけでも思った以上に強く頼もしい。

自分が泣かせ、傷付け、悲しませたあの少女。

だけでも、そんな自分をずっと待ち続けてくれた。

---

「新——ッ……！」

はっと目が覚める。一番最初に視界に入っただのは白い天井。そして、  
眉を潜め今でも泣きそんな蘭の姿だった。

窓からもれる輝いた太陽の日差しが眩しい。そう思い手をかざした。

——生きてる

——まだ、生きてる

「……しぶといねえ、俺も」

いつしか腹を拳銃で撃たれ、目が覚めた時に言った言葉を口からもらした。

意識が遠のく時、あまりの苦しさに死ぬかと思った。息が思うように吸い込めず、呼吸が出来なかった。

そして、口の中に広がった鉄の味。それは凄く不愉快なものだった。

結果的に死ななくて良かったが、これからもあんな苦しまなければいけないと思うと……新一はたまらず苦笑いをした。

「新一」

「心配、かけちまったな……」

新一はまた、苦笑いをした。悲しみを瞳に宿しながら。

「……私って……」

ふいに、下を向きながら蘭は呟いた。

蘭はもう、我慢の限界だった。無理しようとしている新一に限界だったのだ。

椅子に座りながら着ていたスカートをぎゅっと両手で握る。下を向きながらポロポロと流れ出る涙を必死に止めようとする。だが、簡単には止まらなかった。

「私って、頼りないかな……怖がりで泣き虫だから……頼りないかな？」

新一は目を丸める。いきなり、何を言い出すのだろう。

「そんなわけ……」

そう言いかけた時だった。蘭は声を張り上げ真っ赤に染まった瞳を新一に向けたのは。

「カッコつけてるつもり！？何でもかんでも一人で背負って、一人で……一人だけで生きてるつもりなの！？」

新一は落ち着いて、上半身を無理やり起こす。この場所は博士の家だ。灰原が地下に作った部屋。

「蘭……………」

一言、傷付けてしまっている少女の名を呟く。

「人間はね…………一人じゃ生きていけないの。助け合って生きてる…  
…それが、当たり前なの」

「俺は、みんなに頼って生きているさ…………一人で生きているなんて  
思った事がない」

そう。俺は決して一人では生きていない。それよか、頼りっぱなし  
だ。迷惑かけじと頑張っても結局は迷惑をかけてしまう。今の状況  
がまさしくそうだ。

「あのね、新一」

スカートをぎゅっと強く握っていた両手を離す。

「そう思ってるなら、全部あずけてよ。辛さも、悲しさもキツさも

……もちろん、楽しさや、嬉しさも……それを全部預けてから、――  
――本当に頼ってる、と言えるんじゃないかな？」

新一は目を丸くする。そんな新一を見ながら続けて、口を開いた。

「頼るのは悪い事じゃないよ……相手の事を信用してなきゃ、頼る事なんて出来ないもん。信用して、頼り合って、助け合って、支え合って……それが出来てから初めて、”仲間”って言えるんじゃないかな？」

## 最終章・思い出・

---

「今日は元気そうやなあ」

ほのかに暖かい風が新一の髪を静かに揺らした。

今いる場所は、公園。自然が美しい場所。そんな場所に、新一と服部、二人ベンチに座っていた。

「ああ、今日は気分が良いんだ」

「せか、そりゃあいいことやんけ。んで、俺に頼みたい事ってなんや？」

服部は新一に呼ばれこの場所に来た。服部が聞く。

「思い出……最後に思い出、作りてえんだ。」

蘭と蘭の両親。俺の両親。博士、灰原、服部、和葉ちゃん、園子。

——それと……

「歩美ちゃん、元太、光彦も……何だかんだ言ってよ、あいつらが居たから楽しくやっていけたんだ」

——……みんなと、最後の思い出を作りたい。

「長くねえからさ。行ける時に行かなきゃいけねえって思ったんだ」

服部は悲しそうな表情をした。けれど、頷く。例え新一が死を、最期を、受け入れたと分かっても頷く。

実際、あほぬかせつと言ってやりたい所だが、

親友の為になるならば、俺が受け入れる事もまた親友の勤め。  
ライバル

「服部にも来てほしいんだ」

「行くに決まつとるやろ！せやけど、俺とお前……よく事件に遭遇するさかい、また事件起きて旅行台無しになりそうや」

笑いながら服部は言った。

笑いでもしなきゃ、悲しみの表情が表にでてしまうから。

それに気付いてか気付かずか分からないが、服部の表情を見た新一は微笑んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6344q/>

---

蒼く、輝いて。

2011年6月24日18時44分発行